

愛知大學國文學會編

久曾神昇博士
還曆記念
研究資料集

風
間
書
房

昭和 48 年 5 月 25 日 印刷
昭和 48 年 5 月 31 日 發行

久曾神昇博士還曆
記念研究資料集

定價 六八〇〇円

編 者 愛知大學國文學會

發行者 風間 歳次郎

印刷者 中 内 佐 光

發行所

株式會社 風 間 書 房

東京都千代田區神田神保町一の三四

☆ 電話(元)五七二九番

振替 東京 一八五三番

(曉印刷・有朋製本)

(分)3091—(製)730404—(出)0925

まへがき

久曾神昇先生には、昭和四十五年十一月還暦を迎へられ、現在愛知大學學長の要職にあつて、ますます御壯健に活躍を續けて居られる。まことに慶賀に堪へないところである。愛知大學國文學會は、昭和四十一年に結成され、先生を會長に戴き、爾來今日まで會誌十二號を發刊、毎年、國文學會を開催し、國文學の研究發展に盡くして居る。これひとへに先生のなみなみならぬ御盡瘁のたまものにはかならない。

ここに久曾神先生の還暦記念のため、先生の玉稿を卷頭に戴き、同學の教授並びに永く先生の御指導を受けた者の執筆にかかる論文および研究資料を刊行して先生に献呈し、もつて祝賀と感謝の微意を表明する次第である。

昭和四十八年三月

愛知大學國文學會

序

懷古すれば、既に四十數年の昔になる。學生時代の久曾神博士は、その頃の小石川區關口臺町なる松井簡治先生邸の、すぐ東隣な百駒井町に住まれた。その故か、松井先生の藏書閱覽や、提撕をも蒙られた様であつた。松井先生は、稀代の藏書家なので、その藏書中には、貴重な古寫本や、著者自筆本などが、いはゆる汗牛充棟なのであつた。博士は又、東大大學院時代から、宮内省圖書寮、即ち、今日の宮内廳書陵部にも、諸善本や稀觀書閱覽のために、出入せられた。まだ、圖書寮は、一般人の閱覽が、自由に出来ない時代であつたが、博士は、その橘井清五郎氏とも、昵懇なのであつた。橘井氏は、南葵文庫が、紀州徳川家所管時代、その文庫長で、古寫本や古典籍類には、頗る通曉した老學者であつた。氏は、「久曾神君の熱誠な勉強には、敬意を表して居る」と、少々皺唄れた聲で、能く、私に話された事を、今も思ひ出す。

博士はかく、學んで厭はずの習性なので、その研究は、日々に深まり、視野も月々に廣まり、萬事に、曖昧をば絶對に許さぬ、その透徹した緻密な研究態度が、博士の本領なのである。その本領の下で、エネルギーと努力を惜しまず、先づ、和歌の方面から進展開發して行かれたのである。それらの業績として、昭和九年以來、同四十七年までの論究は、すべてこの附録の、「博士の著書・論文目錄」に掲げられてあるが如く、甚だ多い。その間にも、博士は竹本氏を扶けて、穗久邇文庫の創設と、資料の收集方面にも、學究的・精神的貢獻を惜しみなく盡くし、今日、穗久

邇文庫の名聲を學界に高からしめられた。その勞績も、銘記せざるを得ないと思ふ。しかのみならず、博士の志香須賀文庫の藏書も亦、注目すべき貴重書が少くないのである。

思ふに、國文學に携はる人は少くないが、古寫本に接したり、古筆などを見ても、それを眞實完全に理解し、同時に、それを深切に愛惜し得る人は、果たして何程あらうか。決して多しとはしない。言はば「具ニ予ヲ聖ナリト曰フ、誰カ知ラン、烏ノ雌雄ヲ」の感なしとしない狀況なのである。然し、博士は古筆を多く知り、その鑑識の鋭さは、國文學に携はる人の中では、第一人者と稱しても、過言ではないのである。されば、その方面の調査と研究の業績は、この還曆記念研究資料集に示された片鱗でも、他の追隨を許さず、先人未到の調査と研究として、光つて居るのである。全く、新しく開拓せられた分野からの新資料が、ここに提示せられて居るのであつた。

その様な關係で、博士の影響感化は、後輩や子弟に顯著と見るべく、この資料集にも、勅撰集の重出歌關係の綿密な考察、源氏と狹衣の古筆切關係の周到な勞作、萬葉集の漢字使用例の特殊研究の如き、和歌と物語方面の業績、及び、芭蕉の生誕、その他、芭蕉をめぐる特殊面の調査考究や、倉橋勝暉、即ち黄表紙「金々先生榮花の夢」の作者、戀川春町の遺誠の如きは、春町に關する作家的解釋上、極めて有益な論究であり、穗久邇文庫藏本なる大學鈔は、抄物の類として、後の江戸の朱子學にも連なるべき著作で、その方面には重要な參考となる一である。

ともあれ、この記念論文集を一覽すると、研究と調査に加へて、翻刻による重要な新資料が提供せられて居る點では、斯界を裨益啓發する事が、僅少でないといふ、特記するに躊躇しない。

最後に、博士の健勝と自愛とを祈請し、「南山ノ壽ノ如ク、鶯ヶズ崩レズ、松柏ノ茂ルガ如ク、常綠ナル」様に長

生して、更に、次々と、記念論文集を、世に問はれる事を希求し、貞淑佳麗な夫人の陰助をも、ひそかに欽尚懷想しつつ、燕辭を連ねて、ここに序とするものである。

昭和四十八年三月二十五日

山岸 徳平 謹記

目次

まへがき	愛知大學國文學會	
序	山岸 徳平	
如意寶集(研究・翻刻)	久曾神 昇	一
麗花集(研究・翻刻)	久曾神 昇	一〇
千穎集(解題・影印・翻刻)	久曾神 昇	一〇
檜垣姫集(解題・影印・翻刻)	久曾神 昇	一〇
勅撰和歌集の重出歌	樋口芳麻呂	一八
源氏・狹衣物語古筆切について	藤井 隆	二三
芭蕉研究覺書	大磯 義雄	二六
倉橋勝暉「遺誠」について	廣瀬 朝光	二八
萬葉集の「上」「中」「下」音訓義攷	津之地直一	三〇
翻刻 穂久邇文庫藏「大學鈔」	中出 惇	三一
附録 久曾神昇博士 略歴・著書・論文目録		三五
跋	編 者	

如意寶集
(研究・翻刻)

久曾神昇

如意寶集 研究

如意寶集の完本は、未だ管見に入らないが古筆斷簡の中に「如意寶集」と題名の存する一類があり、早くより注意せられてゐる。筆者を宗尊親王（二三五薨）と傳稱してゐるが、決して鎌倉時代のものではない。その書風は、高野切古今集（二四八年頃書寫）の第二種（源兼行）及び第三種（藤原公経か）に近く、傳宗尊親王筆十卷本歌合（二〇五〜二〇六年成立、原本）の中にも類似的の書風が多く見出されるが、それらより少しく後れるものであらう。閑雅優麗、溫順秀麗の趣致に富む墨蹟であり、白河天皇御代（二七三〜二〇六）あたりの書寫にかゝるもので、元暦校本萬葉集（二〇九年頃書寫）より、少しく早く書寫せられたやうに思はれる。昭和九年以來注意し、田中親美、相澤春洋、田中塊堂氏をはじめ、諸家の示教を蒙り、その斷簡を集録し、昭和二七年「平安稀觀撰集」（注二）の中に收載したが、その後も若干出現したので、補説したこともある（注三）が、全文を一括しなければ、意義がないので、再びここに掲げる次第である。

近衛家舊藏如意寶集目錄（注三）によつて、その組織及び歌數は知られるが、全内容は知られず、従つて現存の古筆斷簡も一應吟味する必要があるのである。即ち全く同筆蹟、同料紙であつても、必ずしも同一歌集とも限らないのである。即ち傳貫之筆部類家集切は、兼輔集以下の六家集があり、傳行成筆和漢朗詠集のごときも、御物雲紙卷子本と關戸家色紙卷子本とは同筆であり、御物唐紙粘葉本、伊豫切、法輪寺切、近衛本なども別の一類であり、傳行成筆針切のごときも相模集と某僧（重の子）の集とに區別せられる。さてこの一類を調査するに、それぞれの斷簡の歌を見る

に、古今集、拾遺抄（拾遺集）と一致するものもあり、何れとも一致しないものもある。しかして「如意寶集」と明記してあるものも二葉ほどある。従つてこれらの一類を、古今集、拾遺抄、如意寶集の三撰集の斷簡と考へることもできる。また拾遺抄と如意寶集とは極めて近似してゐたので、それを同集とし、古今集と如意寶集とを書寫したものと考へられ、又すべてを如意寶集と考へることもできるのである。即ち三撰集か、二撰集か、すべて同一撰集か、その點を吟味しなければならない。日暮帖所載の二葉に次のごとくにある。

如意寶集卷第□

夏

冷泉院の東宮におはしましける時百首の和歌たてまつりけるなかに

帶刀長源重之

はなのいろにそめしたものをしければころもかへうきけふにもあるかな

なつのはじめによみはべりける

盛明親王十五

はなちるといとひしものをなつごろもたつやおそきとかぜをまつかな

四月さけるさくらをよめる

伴 利定

あはれてふことをあまたにやらじとやはるにおくれてひとりさくらむ

しかして卷首の二首は、そのまゝ拾遺抄の卷首となつてゐるのである。二首の歌のみならず、その詞書や作者名までも、更にそれがそのまゝ卷首となつてゐることを考へると、如意寶集と拾遺抄とは極めて酷似してゐたものと知られる。従つて、拾遺抄（拾遺集）の斷簡と考へられてゐたものも、恐らく如意寶集の斷簡とすべきであらう。次に古今集

と一致するものは四葉ほどあり、三十回手鑑所載のは多歌二首（躬恒・元方）で古今集と順序も一致してをり、某家藏のは哀傷歌一首（業平）とその次の歌（滋春）の詞書の一部にすぎないが、古今集と順序まで一致してゐる。しかし詞書が甚しく相違してをり、某氏藏の一首（式部卿親王）のみで、詞書が相當に相違してゐる。更に故尾上八郎博士藏のは二首（興風・友則）であるが、古今集における位置（望・弄琴）が甚しく遠ざかり、しかも反對になつてゐる。その他に拾遺抄所載の歌と相接してゐるものが、六葉ほどあり、それらを合せ考へるに、やはり古今集の斷簡とは考へられない。前掲夏部卷首の第三首（伴利定）をはじめ、古今集所載歌が如意寶集に存したことは確實であり、詞書などの近似したものも存したのであるから、古今集の斷簡と推定することはできない。拾遺抄所載歌及び古今集所載歌を含み、「如意寶集」と題名の存するに反し、「古今集」及び「拾遺抄」の題名は全く見られないのであり、すべて如意寶集と斷すべきである。

さて管見に入つたものは二七葉で、類別すればは次のごとくである。（なほ今後出現するものも少くないであらう。）

卷	序	部	立	全歌數	斷簡	詞書缺	歌缺	歌一部缺
第	一	春		七二首	一首	一首	一首	
第	二	夏		四〇首	七首	二首	一首	
第	三	秋		七七首	四首	一首	一首	
第	四	冬		四一首	九首	二首	二首	
第	五	賀		三六首	四首	二首	一首	
第	六	別		四七首	七首	一首	二首	一首

合 計	第七		第八	
	戀上	戀下	雜上	雜中 雜下
七七五首	一〇三首	一〇二首	八六首	八六首 八五首
五〇首	二首	五首	三首	五首 三首
一七首	一首	三首	二首	三首 一首
一〇首	二首			一首
一首				

上掲のごとく、管見に入つたのは僅かに五〇首で、全七七五首(内長歌二首)の六%餘にすぎないが、おほよそを推測することができる。

既に知られてゐるごとく、拾遺抄及び拾遺集と極めて密接な關係にある。即ち現存五〇首のうち、古今集所載の一三首を除き、三七首すべて拾遺抄及び拾遺集に見え、殊にその歌の排列順序まで、殆ど全く一致してゐる。即ち三七首のうち、一首づつに分離してゐる八首を除き、二首以上連續してゐて、その排列順序を知り得るものが二九首あるが、それを拾遺抄と對比すれば、次のごとくである。

二首づつ相接してゐるもの 七組 (2 3、7 8、9 10、22 23、24 25、36 37、38 39)

三首づつ相接してゐるもの 三組 (17 18 19、27 28 29、30 31 32)

一首隔たるもの 三組 (14 16、43 44、46 47) 但、古今集所載歌介入一組。

次に拾遺集との關係を見ると、次のごとくである。

二首づつ相接してゐるもの 六組 (2 3、9 10、17 18、22 23、24 25、36 37)

三首づつ相接してゐるもの

二組 (27 28 29、30 31 32)

相隔たるもの

三組 (7 8、14 16、前と19)

相隔たり反對になつてゐるもの三組 (38 39、43 44、46 47)

即ち如意寶集は、拾遺抄とは極めて密接な關係にあり、拾遺集とは少し隔つてゐるといふことになる。又作者についても、「かはやなぎ」云々(宅)は、本集及び拾遺抄には惠慶法師とあるのに、拾遺集には仲文とあり、「みよしのゝ」云々の歌(是則)の次に、本集及び拾遺抄には「彈正親王妹の更衣」とあり、拾遺集には「忠見」とあり、著しく相違してゐる。かくて本集は拾遺抄と直接關係があり、拾遺集とは間接的關係が存するにすぎないこととなる。

次に本集と拾遺抄との前後關係であるが、古今集及び拾遺抄の歌が存するのであるから、古今集及び拾遺抄の歌を抄出して如意寶集を撰んだといふ場合がまづ考へられる。殊に古今集所載一三首のうち、二首づつ一括して二葉まで古今集の排列順序と一致してゐることも考へねばならない。しかし作者名の相違するものもあり、詞書の著しく異なるものもあり、單なる古今集よりの抄出とは考へられない。假に古今集よりの抄出部分が存するとしても、それによつて直ちに拾遺抄よりの抄出と斷することはできない。即ち古今集よりの抄出をも含み、他の諸資料よりも抄録して如意寶集が成つたとしてもできる。従つて拾遺抄との前後關係は、別に考察すべきである。

相違	如意寶集	拾遺抄
43	けふまでとみるにのみだの……	けふのみと見るに涙の…… おくれぬて鳴くなるよりは……

作者名		詞書		排列順	
45	9	35	9	47	44
中納言道綱母	清慎公をのゝみやの太政大臣也。	けさうじてひさしうなりはべりにけるをむなの夏至日をうたがひなくおもひたゆみて、ものいひはべりけるほどにしたしきさまになり侍りにければ、このをむなのいみじうらみわびて、のちにはさらにあはじといひはべりければ	さがのにてをみなへしをみはべりて	かはやなぎいとほみどりに……	いなをらじつゆにたもとの……
				46	
				ぬすびとのたつたのやまに	
				かはやなぎいとほみどりに……	
				6	
			或人の屏風に		
			題不知		
			五月の夏至日にけさうじてひさしうなりて侍けるをむなのこの月はうたがひなくおもひたゆみて、ものいひ侍りけるほどにしたしきさまになり侍りにければ、この女のいみじうらみわびて、のちにはさらにあはじといひ侍りければ	ぬす人のたつたの山に…… なにはえのあしのはなげに…… かはやなぎいとほみどりに……	いなをらじつゆにたもとの……
			小野宮太政大臣・小野宮左大臣		
			中納言道綱母・右大將道綱母		

まづ排列順の相違するものを検するに、拾遺抄(貞和本底本)には次のごとくにある。

大江爲基が家のうりにまうできたりけるかゞみに書付て侍ける

読人不知

けふのみとみるになみだをますかゞみなれぬるかげと人にかたるな

九條右大臣まかりかくれてのちにかの坊城家にかひ侍けるつるのなき侍ける
をきゝて

小野宮左大臣

をくれるでなくなるよりはあしたづのなかよはひをゆづらざりけん

或所に讀經し侍ける法師原の、從僧して小法師ばらのゐて侍けるに、すだれのうちよりをんなの、うのはなをとりてといひ侍ければ

壽玄法師

はなをらじ露にたものぬれたらばもの思ひけりと人もこそみれ

本集には、中間の一首がなく次のごとくである。

(詞書、作者名、欠)

43 けふまでとみるになみだのますかゞみなれにしかげをひとにかたるな

あるところに經供養し侍ける法師ばらの、從僧して小法師ばらのゐてはべりけるなかに、すだれのうちよりをむなどもの、うのはなをりてといひはべりければ

壽玄法師

44 いなをらじつゆにたものぬれたらばものおもひけりとひとこそみれ

鏡を賣りにきた歌は、まことに最適の歌で、爲基を感動させたことが、今昔物語などに詳しい。次の小野宮の鶴の歌も、千年の齡をよく詠み得てをり、心を動かすものである。従つてこの歌が最初から存したとすれば、除去する筈はあるまい。従つて後に補つたと考へざるを得ない。次の三首は拾遺抄(貞和本)に次のごとくにある。